

# PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1997年7月 No.81

## 胎児を守る運動

### 人間の命の価値

教皇ヨハネ・パウロ二世は、一九九一年の四月に全世界の枢機卿をローマに招集なさいました。彼は四日間、この枢機卿団の百二十人のメンバーと会議を行い、文字通り、人間の生死にかかわる問題を討議なさいました。最終日に、これらの枢機卿たちは次のような要請文を教皇様に提出なさいました。

『この特別教皇枢密会議のため聖父によって招集され、すべてのキリスト教徒と彼等の属する文化圏の代表者である、全世界のカトリック教会の枢機卿は完全な意見の一致をもって聖父に対し、人間の生命の尊厳に関し、全枢機卿の真の代弁者として声明を出して下さいますよう要請いたします。』

教皇様はこの緊急要請に対し、御自分の十一番目の回勅(書簡)をお書きになることで応えなさいました。

この回勅は、すべての司教、司祭、助祭、修道女、ブラザー、信徒、そしてすべての善意の人々に宛てられたもので、人間の命の価値とそれが他者によって破壊されるべきものではないという真理に関するものです。この回勅は一九九五年の三月二十五日、すなわち神であるキリストがマリアを通して人間となられた日を思い起こすための

カトリック教会の大祝日である「御託身の祝日」に出されました。この書簡は、その冒頭文の始まりの言葉、「いのちの福音はイエス・メッセージの中心をなしている。」を取って、「エバンジュリウム・ビテ」と呼ばれております。全世界の全ての司教は、個人的にこの回勅の内容とメッセージについて前もって相談を受けました。そして全員が教皇様に対して、人間の命の価値とその不可侵性について、確固として明確に再確認の声明を出してくださる様に願ったのです。

この回勅は四章から成り、二十のセクションに分かれています。各々のセクションは聖書から取られた生命の神聖さに関する一文で始まっており、教皇様は各々の一文についてコメントする形で、その意味を掘りさげて説明しております。

一、『現代における人間の命に対する脅威』は、ちょうど人類の最初の世代に一人の人間が本来なら兄弟と称せられるべき他の人間を殺したように、数万年の歳月を経た今日においてもなお、新たに生まれるはずの胎内の子どもの出生を未然に防ごうという意図が、その

子どもを殺すという行為に結びつき、又、障害ある胎内の子どもの排除という形にもなつてあらわれていきます。又、この生命への脅威は他者の手を借りた自殺や昏睡状態にある人々や重病者、又非常に老衰した人々に対する直接的抑圧という形をとることもあります。しかも、これらの行為はしばしば、国家や行政機関の承認や援助を受けている場合もあります。「人間は何をして自由だ」という誤った思想が宣伝され、善と悪の区別の必要が無視され、国家の法律の上でも、「望まれない人々」の排除が様々な形で最高の価値であるかのように正当化されています。これらはまるで愚か者が心の中で「神などいるものか」とつぶやくのが正しいかのように行われていきます。しかし、神の声は人の心の奥深いところで常に響いているのです。それは『私はあなたの主なる神である。あなたは殺してはならない。あなたの殺した兄弟は、今、どこにいるのか？あなたが殺した者の血が地の下から私に向かって叫んで

いる。』という声です。心の真つ直な人々や神を真に信ずる人々がこれらの殺害行為に反対して立ちあがる時はいつも、反対者の側からすさまじい戦いが起こされます。それは、命を尊重する文化と殺人を容認する文化との戦いです。

二、『命に関するキリスト教のメッセージ』とは、私たちの創造主が私たちの内に理性的存在としての御自分の似姿として、人の命を創り、イエス・キリストの十字架上の死によって、私たちの命を贖い、それによって、死後、三位一体の神の神的生命にあずかる者として復活する資格を与えてくださったという事です。人間は、男女



大使ウィリアム・アケイン・カルー大司教

が、神の介入を受けて、新しい人間の命をつくりだすという点において、神の創造の力に参与するようにさえされています。人間の生命の深遠な意味は、イエズスが十字架上で人類の罪の贖いのため、御自分の命を投げ出し、天の御父に捧げた時に、明らかにされました。イエズスは人が他者を救うために自分の命を投げ出す時、命はその中心、その意味と成就を見いだすのだということ明らかにされたのです。」

三、『神の聖なる法律』は、「汝殺すなかれ」という掟を含んでいます。神様は御自分のために私たち人間をお創りになりました。それゆえ、聖アウグスティヌスの言うように、「我らの心は神を見出し、そこに憩うまでは決して本当の平和を味わうことがない」のです。人間が自分をそして他人を殺してはならない理由は、私たちが、そして、すべての人間が（自由意志と理性を持った）人間が神様の似姿として創られたものだからです。この神の似姿は、一人一人の人間の魂が、個別に神によって受胎の瞬間に、創造される時に、神的な方法で、各々の魂に与えられるのです。従って墮胎は、神の似

姿として創られている母の胎内の子ども（…それは、私たちの小さな兄弟、姉妹なのですが…）を故意に破壊して亡き者とする行為なのです。又、墮胎は、御自分の神的な生命にあずかる者として、その似姿を人の生命にお与えになった神様へのひどい侮辱となります。このような分析は安楽死や自殺他者の補助を得たものであるうがなろうが（の意味にも、そのままではまります。聖書は、聖パウロのローマ人への手紙の十四：7〜8において、人間のあるべき姿について次のように述べております。「私たちのうちのだれも、自分のために生きる者はなく、自分のために死ぬ者もない。私たちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ、生きるのも死ぬのも、私たちは主のものだからである。」人間の作った法律が何を許そうとも、聖書の「使徒行録」が五：29で述べるごとく、私たちは人ではなく神に従わねばなりません。」

四、『人間の命を大切に新しい文化をつくりだすために』この回勅は、この世で最も貧しい存在であり、最も弱く、最も無力で、かつ最も不幸な存在である胎内の子どもたちのための確信に満ちた勇敢な弁論です。このカテゴリーに属する幼い人間たちが、その最も基本的な人権すなわち生命を保つ権利において抑圧される時、

教会は無一物のこの子どもたちのために代わって擁護の声をあげることは自分の義務であると感じているのです。教会の叫びはこの世界のすべての貧しい者、又その人権において脅かされ、軽蔑され、抑圧されているすべての人を弁護するイエズスの福音の叫びなのです。

「良き羊飼」である教会は自らにゆだねられた群れとそのすべてのメンバーを守り、いつくしみ、育みます。一方、この世の権力と物質的な豊かさを持つている人々は、それを他の人々、つまり赤ん坊のために分かちあつて使うことに対して心を閉ざし、

逆に、彼らの命を破壊するため様々な工夫において、自分の力とお金を使っています。このような人々は、死を容認する文化を促進させているのです。そのような文化に基づく社会では、避妊の行為から始まって、さらに情け容赦なく墮胎、すなわち嬰兒殺しが行われ、さらに年若い人々や、身体障害者、衰弱した人々に対しては、安楽死が適用される方向に向かっていきます。さらに家族という制度そのものが、様々な攻撃にさらされています。なぜなら、新しい生命が歓迎され、保護され、成長していくように援助を受けるのは、まさしく、家庭という場においてだからです。家庭こそ人々の

人間性をはぐくむ学校であり、そこにおいて生命の福音が新世代に伝えられるべき場なのです。この場において、命は、すべての人がそれに対して権利を有しているところの愛情、心のこもった世話、やさしい心づかいなどに基盤を置く尊厳の輝きの中で、光彩を放つのです。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、この回勅のしめくくりの部分でカトリック教会の偉大な教父、聖イレネウスの言葉を思いおこさせています。「神の栄光は人間の

上に反映される。人の命は神の写しである」という言葉です。イエズスは「神は死んだ者の神でなく、生きている者の神である」とおっしゃいました。イエズスこそ人類の救い主であり、生きている神の御一人子なのです。（マタイ伝十六：16）私たちにとって、何にもまして、この御方こそ、そして、この御方だけが、道であり、真理であり、そして生命の源なのです。

ウィリアム・アクイン・カール

「わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別した」。

（エレミヤー・5）

人間のいのちはすべてその初めから、神の計画のうちにあります。ヨブはひどい苦難の中で、母の胎内に自分の体を不思議にも形づくった神のわざを思い巡らすことを中断しました。（いのちの福音 #44）

## 胎児の人権宣言

前文 人間はひとりびとりが、受精の瞬間から自然死にいたるまで、生来の尊厳と固有の価値を有するので、今日我々は公けに以下の六ヶ条の宣言に同意する。

第一条 我々は、胎児ひとりびとりが、受精以後の発育のすべての段階において、人間であるという科学的事実を確認する。

第二条 我々は、本宣言に定められている権利を、人種、胎児年齢、性別、国籍、宗教、社会—経済的出自（生まれ）、障害の有無、その他のいかなる理由によっても差別することなく、尊重する。

第三条 我々は、胎児が、1948年の国連の人権宣言に述べられている胎児以外のすべての人間の基本的権利と同様の権利を有することを確認する。我々は、この権利が立法によって認められることを要求する。

第四条 我々は、胎児ひとりびとりが良好な胎内環境で発育する権利を有することを認める。この環境には出産までの母親の適切な保護と両親への支援を求める権利が含まれなければならない。

第五条 胎児が、受精の時から、科学的、医学的、または医学外的実験や利用に供されない権利を有することを確認する。ただし、この実験や利用が胎児に直接役立つ場合を除く。

第六条 我々は、胎児の発育とそれに関する諸問題についての科学的事実の教育の推進に努める。また我々は、女性が子供を産み育てるのを難かしくしている社会的、経済的ならびに法律的諸条件の改善に努める。

結び 以上にかんがみ、我々はすべての国際団体、政府、組織、ならびにすべての善意の人々が、ここに含まれる各箇条を公認し、実行するよう強く奨める。

1991年4月27日 「国際生命尊重会議東京大会」

## 私でよかった！

また今夜も言われた！私達家族は、長男の10才の誕生日のお祝いに、地元のレストランで食事をしていました。一番下のまだ赤ん坊の息子は声を限りに奇声をあげていた。すると、顔見知りの女性がやってきて、同情するような目で私を見るとこう言った。その赤ちゃんがあなたの子どもでよかったわ。私の子じゃなくて。もつ子どもなんて欲しくなくなっちゃう。」今までに何度聞いたかしら。このセリフ。それに何だか腹の立つ言い方だ。私はすまして彼女を見返し、言っちゃった。「あーら、私もよかった。この子があなたなんかの子じゃなくて私の子で！」すると彼女はげんそうな目つきで私を見つめると、去って行った。

いったい何人の人が「私じゃなくてよかった」と言ったことか、信じられないほどである。この子が生まれるまで私達は三年も待ったのだ。彼は私達の四人目の子どもで、他の三人の子ども同様、全く神様からの贈りものとしか言いようがないと考えている。

よかった！13才と10才と7才の他の三人の子どもがこの子を家族の一員として暖かく迎えてくれて。あの子達がこの子を抱きしめ、「ご飯を食べさせ、着替えさせ、入浴を手伝ったりしてくれてよかった。赤ちゃんの世話がとても大変なこと、小さい時にみんなもしてもらったことを知ってもらえてよかった。たぶん、これでもっと親のありがたみを分かってもらえることだろう。」

よかった！この子がいて。この子に会うために、近所の五人の学生がしょっちゅう立ち寄ってくれて、抱いていつてくれる。彼女らが小さな赤ん坊なんかにあんなに夢中になるとは、想像もしていなかった。

よかった！家族や友達がこんなにも親切にしてくれ、助けてくれて。みんなこの子が生まれる時それは心配してくれた。彼らは友達や家族の素晴らしさを思いおこさせてくれる。ほとんどの人が友達や家族の大切さを忘れてしまっていると思う。

よかった！この子が美しい洗礼の秘跡によって、私達の教区に受け入れられて。その日は、長女がミサの曲をギターで演奏し、他の二人の子どもがストールとキャンドルを運んできたっけ。

よかった！つい最近この子が初めて笑うのを見た。先週のある雨の日、彼がにこっと笑ったのだ。おかげでその雨の日が本物のお陽様もかなわないほど明るく、光に満ちた日になった。

よかった！この子のおかげで家にいることが出来る。この子は私達を落ち着かせてくれた。彼が生まれるまでは、私達はいつもとどこかに行きたいに行かない感じがしていた。こうして再び家でみんな一緒に過ごすのもいいものだ。

子育てが気楽だなんて言つつもりは毛頭ない。この時代に子育てするには、配偶者への深い献身と神様への真の信頼が必要だ。しかし、それでも私はこう思う。よかった。この子の母親が私で！

# いのちの福音

## 完全な生命擁護

一年前にローマ法王、ヨハネ・パウロ二世が全司教に宛てた回勅『いのちの福音』に関して驚くべきことの一つは、その内容が人間の生命に対するカトリック教会の関心事を、生命の尊重という完全な道徳律として統合して記述していたことです。

『いのちの福音』は、胎児を実験道具として用いることや、中絶や安楽死など、人間の純粋な生命に対する脅威について正確に記述していると同時に、労働者の権利を守ることや戦争や死刑を批判すること、さらには環境問題への配慮などについても強く述べています。

戦争と死刑に反対することは「希望の表れ」であると、『いのちの福音』の中でローマ法王は述べています。また、国家に自己防衛を合法化する権利があるとはいえ、「戦争反対を今まで以上に強く訴える新しい感性が、人間の衝突を解決する手段として活躍し、さらにその感性は、武装した侵略者に対し、より効果的で非暴力的な方法で立ち向かおうとする傾向を強めてきた」と

ローマ法王を勇気づけてい

ると述べています。同様に、「死刑が社会の合法的な防衛手段の一つであるように見られている

が、死刑に反対する大衆の意向が強まってきていることも確かである」とも述べています。実際に、現代社会は犯罪者が更正するチャンス完全に否定しないことによって、効果的に犯罪を抑圧する手段を持っているので

要するに、「生命の文化」を築くということはキリスト教信仰の大きな挑戦を意味しています。「何百万もの人間の生命に対して行われてきた暴力に対してどうして黙っていられるのでしょうか？特に子ども達は、人間間、階級の不公平な資源の配分によって、貧困や栄養失調や飢餓を強いられているのです」ローマ法王は、「そして、恥ずべき兵器売買や戦争につきまとう暴力

についてはどうでしょうか？これらは、数多くの武力衝突を生み、私達の世界を血で汚しているのです。また、世界の生態系にむやみに手を加えたことが原因で広まった死についてはどうでしょうか？薬物の犯罪的な蔓延

による死についてはどうでしょうか？」と尋ねています。

**現在見られる人間の生命への様々な脅威を全て並べ立てることは不可能です。**

さらにローマ法王は訴えています。「人間の生命を尊重する強い環境を築くためには、家族と政府が必要で、さらにはそういう風潮の文化自体も必要なのです」。

『いのちの福音』は、すべての教会関係者ー命ある人間であり、命のための人間であるーに対する緊急な要請であり、「真実と愛のある文明社会の建設のために、公正と結束が確実に強まるように、さらには人間生命の新しい文化が確立されるように努力することを要請しています」。

生命擁護家であるローマ法王は「私達は最初から、神が私達を変えるために」

助」を提供することと、「家族のいない人を親切にもてなすこと」も含まれているのです。

生命擁護活動には、「多くの人が家庭や病院や孤児院や老人ホームで愛情を込めて見せているように、開放的で自己犠牲的で没我的な日々の態度」もまた必要なのです。

このよつな日々の慈善行為は「真実と愛の文明社会の基礎」を強固なものにします。そして、その文明社会では、個人と社会の生活で最も純粋な人間の価値を失わずにいられるのです。たとえば、ほとんどの人がこの慈善行為に気づいてくれないとしても、「隠れたことを見られる」(マテ

## 「少し多め」の人生

「私達は最初から、神が私達を変えるために」

ジョナサンが生まれたその時、肩に置かれた看護婦の手が私には重く、悲しく感じられました。医師は大きく息を吸い込んで言いました。「まことに残念なのですが

「この子はダウン症候群なのですね？」私は確信しました。なぜ

オによる福音書 六：6) 神が、この活動に報いてくれるだけでなく、その活動を全ての人々のために永続する良い実となるように変えて下さるといふことを私達は確信しているのです。

ステイブ・ダンハム著

ならその子は、ほんの少し様子が変だったからです。それにその時私はもう44歳で、医師から子どもがダウン症候群になる危険性が高いと警告されており、中絶を勧められたのでした。けれども私は、その必要はないと断りました。神が与えて下さる赤ちゃんなら、どんな子でも感謝して受け入れるつもりだったからです。

夫のトリップも、「家にいつまでも赤ん坊がいるといいねといつも話していたんですよ」と言っていて賛成してくれていました。そして

優しい眼差しで生まれた子を見、こう言いました。「この子をジョナサンと名づけよう。」ジョナサンとは、ヘブライ語で『神の贈り物』を意味します。

神が我々を変えるためにジョナサンを遣わしたのだということが最初から私達には分かっています。けれどもジョナサンが生まれた当初、私達には彼の病気に関する知識がほとんどありませんでした。それはまるで、無知の

広大な原野をはるかに見下ろしているかのようでした。まず何よりも実際の知識を得ることが必要でした。

最初に知ったのは、ダウン症候群が染色体の異常によって起こる病気であるということでした。私達はみな、23対の染色体を持っていて、そこには例えば目の色や背丈、血液型など、私達のすべてを決定する遺伝子が含まれています。しかしダウン症候群の人は、生まれつき21対目の染色体に余分な染色体があるのです。

おそらく、ダウン症候群が障害と呼ばれているために、世間の人々はそれが良くないことだと思ってしまうでしょう。確かにダウン症の患者本人にとっても、またその家族にとっても、人生は普通より困難なものになりがちです。ダウン症の子どもはしばしば体調を崩します。その予防のため

に、普通より頻繁に医師にかからなければなりません。また、普通の人にとっては簡単にできること、例えばスプーンを持つたり、歩いたり、話したり、字を読んだ

り書いたりすることなどが簡単に出来たり多くの必要とすか

ら、教える多くの時間が必要です。生懸命励ましてやらなくてはなりません。普通の人の平均的IQは百ですが、ダウン症児のIQはおおよそ75です。

昔は、ダウン症の子どもが生まれると親はひどく絶望したもので、そんな人々に、世間はよく子どもを施設に預けてその存在を忘れ、何事もなかったかのように生活を続けていくようにとアドバイスしたものでした。医師達の多くは、ダウン症児の生命など生きる

に値しないと断じ、そのため彼らは延命措置を受けられず、餓死するままに放っておかれました。

今日でも、妊娠中に胎児のダウン症の可能性を探るさらに精度の高い検査を求めて、医学は研究を続けています。

そのような検査が開発されれば、出産前に母親が「問題」を追い払うことができるからです。もちろんここでも、ダウン症を患って生きる人生は生きる価値がないという基本的な前提は変わりません。

しかし、ダウン症児をめぐる状況には明るい面も見えてきています。ダウン症児に大きな変化が現れているのです。家庭で育てられたダウン症児は、施設で育てられた子どもより障害が軽いということが、一世代ほど前に分かりました。彼らの育つ環境において愛情こそが最も大切であることは言うまでもありませんが、それと同じくらい両親や兄弟からの関心や手助けが必要なのです。

ダウン症児の潜在能力を引き出し、親に彼らに対する手助けの方法を教えるために、早期教育プログラムが開発されました。この教育を受けた子どもは多くは現在、地域で職業についています。私達はその過程の中で、ダウン症候群に対する人々の無知を乗り越えると同時に、大きな恐怖も乗り越えてきたのです。

さて、私達はジョナサンが生まれた時、何も恐れてはいませんでした。それは神がすでに私達の心に、彼を受け入れる準備をさせて下さっていたからです。簡単なことではないと分かっています。したが、神にはお考えがあるのだと私達は確信していました。

妹のマデリーンが生まれた時、ジョナサンは一歳になっていました。ジョナサンは普通の子どもより発達が遅れていたもので、二人はすぐに双子のようになりました。マデリーンが一歳で、ジョナサンが二歳の時、二人は同時に歩けるようになりました。二人は一緒になつて探検したり、散らかしたりするのが大好きでした。けれども私達は、妹のマデリーンの成長が兄をはるかに追いつく時が、もうまもなく来るであろうことを知っていました。

そこで私達は、ダウン症の子どもを養子にし、その子とジョナサンが友達のように成長して行けるようにしたいと考え、祈りはじめました。

一九九五年の五月、ある男の赤ちゃんが生まれました。両親はダ

ウン症である彼を受け入れることができなくて、愛情を持って彼を育ててくれる家庭を望んでいました。神の祝福があつて、その家庭に私達が選ばれたのです。私達は彼をジェシーと名づけました。ヘブライ語で「神は存在する」という意味です。私達一人一人が神の創造の証であることをこの時はつきりと知ったのです。

「あなたは私の腎をつくり、母の胎内に織りこまれた。恐るべき驚異のあなたを、私はたたえる。そのみ業は不思議で、あなたは私の魂を知りつくされる。」(詩篇三九：13-14)

ジョナサンとジェシーを見て、人は何か足りないと思うかもしれませんが。しかし、私の見方は違います。神が彼らに与えられたものは、普通より少なかったのではなく、少し多かったのです。染色体の話覚えていてはどう?

それでもなお、なぜ?と問う人もいます。なぜ、神はジョナサンやジェシーのような人々をお造りになるのか。私なら、それは彼らの家族や友人のためだと答えるかもしれません。なぜなら、全力を尽くした時、むしろジョナサン達の方が私達一人一人を助けてくれているからです。彼らの存在が、私達の中の少し足りなかった部分を、彼らと同じように少し多めになるよう補ってくれるのです。

# 教会、そして 身障者に願うこと

娘のシエラは19年間、脊髄筋萎縮症(筋肉が動かなくなる病気)と共に生きて、ついに聖なる父のもとに召された。けれども、娘のおかげで私達家族は変わることができた。娘との生活で学んだことは、私達だけでなく、カトリック関係者の各家庭にも通じるはずだ。シエラは一九九三年七月二十八日に、余病を併発して死んだ。身障者をもつ家族が集まった黙想会から帰ってすぐのことだった。黙想会の間、教会と障害児をもつ家族との交流を見て、教会も身障者側ももっと努力が必要だと感じた。

黙想会での話題は、まさに干差万別というところで、肉体的・精神的(あるいは両方の)障害をもつようになった経緯もまたしかり。遺伝・出産時のトフル・誤った薬物投与・男性による暴行、そして事故など。日常生活への適応の度合、受容する力、目指すところは人によってバラバラだが、ひとつだけ共通しているのは、教会からの歓迎と奉仕と理解を必要としている点だ。

同じくクリスチャンで、同じような心痛や感激を味わってきている他の家族と、数日間生活を共にするのはどんなものだろうか興味があり、シエラとあと下に四人いる子ども達のうち三人と一緒に参加した。堅苦しい会合ではなく、小さい子どもたちの遊びも用意されていた。世間では「普通じゃない」ことが普通という異空間に居合わせたのは、確かに得がたい体験だった。だが、話題のほとんどが愚痴めいた泣き言だったのは残念でならない。

さまざま境遇にある家庭に協力的な教会ももちろんあったが、その家庭を教会に縛りつけようとし

## 【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

## 【カラー・パンフレット】

[201] 生か死..... + 郵送料  
 [202] 第二の処女生..... + 郵送料  
 [203] デート..... + 郵送料  
 [204] どうするの?..... + 郵送料  
 [205] "NO"という技術..... + 郵送料  
 [206] テイーンの出産コントロール..... + 郵送料  
 [207] パーजनの瀬戸際..... + 郵送料  
 [208] していましたか..... + 郵送料  
 [209] 親権限「と10代の性」..... + 郵送料  
 [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料  
 [211] 中絶行為は女性を解放しない..... + 郵送料

## 【ポケット・サイズ】

[301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料  
 [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料  
 [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料  
 [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料

## 【ビデオ+ 本・日本語】

[401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料  
 [402] 生と性のシンフォニー.....(VHS).....12000 + 郵送料  
 [403] ビリングス・メソッド.....(VHS/Beta)....7000 + 郵送料  
 [404] いのちーおくりもの.....(VHS).....13000 + 郵送料  
 [407] 命美しいもの = one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料  
 [409] 聞こえる? 天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料  
 [500] (本) 生命問題に関する...(カトリックの教え).....2987 + 郵送料  
 [501] (本) 自然な家族計画...(ビリングス・メソッド).....1000 + 郵送料  
 [503] (本) プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料  
 [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料  
 [505] (本) いのちをみつめて.....500 + 郵送料  
 [506] (本) 命あるすべてのものに(マザ・テレサ).....650 + 郵送料  
 [507] (本) 私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料  
 [508] (本) いのちの福音.....1500 + 郵送料  
 [509] (本) 小さき生命のために.....1300 + 郵送料  
 [511] (本) 赤ちゃん:最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料  
 [512] 本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料  
 [513] 本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料  
 [514] 本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料

たり、不幸を最小限にとどめるために足繁くミサに通うよう言い渡されたり、「孤立」「孤独」「誤解」の言葉を何度も巧みに利用している所もあるらしい。

中には、自分達を受け入れてくれる団体を見つけれずにいる人達もいた。

未解決の問題の重要性和、自分自身の経験に照らし合わせて、今こそ立ち上がって、教会と身障者をもつ家庭に事態を理解してもらわねばならないと思いを固めた。手始めに、身障者をもつ家庭が直面する問題点をまとめてみた。

ある月刊の情報紙でこんな統計を目にした。

1. 子どもが障害をもって生まれた家庭のうち、5組中4組は離婚している。

2. 障害児をもつ家庭の95%は教会に通っていない。

3. 配偶者が障害をもつ場合、15組中4組の夫婦は離婚している。

自分自身の経験から言えば、よそと違って不安、最も手のかかる子どもが今何を欲しているか気づいてやる必要、経済的負担、時間的拘束、精神的消耗などがのしかかってくる。だからこそ、教会はこうした家庭の側にいなければならない。

キリストが「弱者」である私達に「僕」となるチャンスと義務とを同時に与えたことを教会は認識してもらいたい。身体上の障害を取り除くだけでは称賛に値しない。力のある健康者ばかりが重要視されている世の中で、「障害者」が向き合ねばならない精神的、肉体的、経済的な負担をできるだけ軽減するよう努めることが、神に仕える人間の責任であらう。

弱い人間とその家族を、聖職者という立場

## [511] 赤ちゃん:最初の十ヶ月の旅

注文:	1 - - - - - 5	1部 = ¥1100
	6 - - - - - 20	1部 = ¥75
フルカラー	21 - - - 999	1部 = ¥50
	1000 - - 以上	1部 = ¥35

パンフレット申し込は・・・				自由です 組み合わせは
1	～	5	1部 = 35円	
6	～	100	1部 = 25円	
101	～	500	1部 = 20円	
500	～	以上	1部 = 15円	

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

から見ただけでなく、自分自身の成長につながる好機と考えて欲しい。そのためには身障者に個人的に接したり、ミサで彼らの苦闘を感じとり、神の力を実感することだ。

コリント人への第一の手紙1:27に「神は…強い者を辱めるために、世の弱い者を選ばれた」とある。

クリスチャンは、障害者の万々の考えをもっと聞き、教会は障害をもつ人達に活動の場を与えなければならぬ。彼らの考え、創造性、感受性を活かせる役目はたくさんある。自分にも刀があり、教会や人々の生活に役立てるとわかれば、彼らにとつてもよい刺激だ。シエラはわずかばかりの障害者年金の中から教会に寄付し、Compassion Internationalという支援機関を通じて一人の子どもに援助をし、エチオピアで布教活動をしている友人に送金することに大きな喜びを見出していった。

高校生の頃は友人のすすめで簡単な工作を手掛けた。シエラは腕が自由に使えるので、小さな紙袋にステンシルで模様をつけて販売した。その後、ピースで作ったプレスレットに短い詩を添えて売ったりもした。また、役に立ちたいというシエラの気持ちやその表現に気づいてもらえず、教会では時々、彼女の能力が

見落とされそうにもなった。

だがこの失態も、心身障害と向き合っている人達とその家族には参考になるだろう。教会やクリスチャン仲間の人々の心を読む能力がなく、身障者に何ができて家族にとつて何が喜ばれるかすらわからないという現状だ。彼らに身近に接して勉強しなければなるまい。希望を実現させようと誰しも計画を練るものだが、その際、神が適任者を示してくれることも忘れないでほしい。かつて私はシエラと友達になり、

車椅子の介助を手伝ってくれたり、よい関係を築いてくれる人をお願いします、と神に祈ったことがある。すると、驚いたことに神は、選んだ人で娘の周囲を一杯にして下さった。刑期を終えた囚人、スペイン人の教師、ろ

うあ者など様々な人達を。最後に、ぜひ言っておきたいのは、目に見えるものも見えないものも、今の苦勞は将来の幸福に比べれば本当に微々たるものだということだ。私達はみな

「この宝を陶器の器の中にもっている」(コリント人への第二の手紙4:7)が、中には人より沢山持つて人がある。力を合わせて神を喜ばせようではないか。互いに助け合い、自分とは違う世界を見たいと切望している暗闇の世界にも光を注ぎながら。

レディー・カークパトリック

## ローマ法王と若者との

### Q & A

Q: 不思議でたまらないんですけれど、神様はどうして人間に死を与えたんですか。死ぬってとても恐ろしいことなのに。もし、神様が私達を愛して下さっているのなら、私達をおそろしからず様なことをどうしてなさるのですか。

A: 神が我々に死を選んだのではないのですよ。アダムとイブが悪魔にそそのかされた瞬間から、この世に死が入り込んできたのです。カインが弟のアベルを殺した時、神はたいへんお悲しみになつて、カインにこう言われました。「何をしたのか。大地から、私に向かって叫ぶおまえの弟の血の音が聞こえる。」(創世の書 四:2~13)アベルと同じ嘆きは何世代にもわたつて叫び続けられてきました。その声は神のお耳に届いています。神は、我々を愛して下さるあまり、潔白で純粹かつ罪のない我が子の死によって、人類に再び生を与えて下さることを思いつかれたのでした。死によって、イエス様は我々に生命を与えて下さいました。「私は羊たちに命を、豊かな命を与えるために来

た」(ヨハネによる福音書 十:10)神の御慈悲で我々が今日あることを、何にもまして感謝しなければいけません。

Q: もし、妹が誰かに殺されたら、私はその殺人者を絶対に許せません。正義が行われなければならぬと思うし、殺人者は死刑にするべきだと思います。

A: 刑罰執行制度は、社会を守る目的で作られたのです。どんな犯罪でも裁きを受けて罰を与えられなければなりません。でも、あなたの言つた妹さんの例よりももっと凶悪な犯罪でさえ、社会の安全を守るために方法がない場合以外は「犯罪者に死刑を与える」ことは避けねばならないのです。神のみがこの言葉を言える唯一のお方なのです。「殺すのも生かすのも私だ」(第二法の書 三十二:39)

Q: 中絶についていろんな意見があります。私の友達も、レイプみたいな特別な事情があれば、仕方がないと言っています。そうなんですか。

A: まず最初に、神の創造した生命体を物扱いするような科学の定説から抜け出すことです。母親の胎内にいる赤ん坊は、神からの贈りものであり、あなたや私と同じ人間です。確かにその体は完全に形成されてはいないかもしれませんが、私達のからだにも成長段階を経て変化し続けているわけですから。受精の瞬間から、赤ん坊はすでに人間であり、我々と同じように生きる権利があるということを決定づけているのは赤ん坊の魂が生き続けていることです。「おまえを胎内につくるより先に、私はおまえを知っていた。母のふところから出るより先に、私はおまえを聖別し、」(エレミアの書 一:5)我々に何が起ころうと、無実な生命を奪うべきではありません。親の罪のために子どもが死ぬべきではないのです。

Q: 母はプロ・ライフ派であんな言葉をよく口にします。私も中絶には反対ですが、法的に許されていることに真正面から反対するのは本当に正しいのでしょうか。

A: 正しいどころか、道徳的義務だと思えます。カインがアベルを殺したすぐあとから、神は、「隣人を重んじよ」の言葉とおり、

# 日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780高知市新本町一丁目7-3 1

電話 / Fax 0888-73-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforiyoma.or.jp

## 会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円  
一万円 五千元 一千元  
無料: 毎月プロ・ライフ・ニューズレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

## 事務所時間:

月一金 12:00 - 17:00  
日のみ 10:00 - 13:00  
土曜日 休み

## 御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店  
口座番号: 0573553  
日本プロ・ライフ・ムーブメント  
郵便局: 「郵便振替」  
現在口座番号: 01660-5-39607  
日本プロ・ライフ・ムーブメント

## 事務所便り

七月、子ども達は川や海で水しぶきに負けないくらいの歓声をあげ、水遊びに興じる時です。それと同時に水難の悲しい知らせも毎年聞こえてきます。今年は水の事故から子ども達が守られますように...

先々は障害胎児の中絶容認、そして先月は脳死関係の新聞記事をニュース以外のページに印刷して、皆様にお送り致しました。これからも出来るだけ毎月一つのテーマでマスメディアで取り上げられている事をお知らせしたいと思っています。そのテーマを読んで、周りの人々と話し合い、考える会を作られることはいかがでしょうか。

七月十三日は日本の生命尊重の日です。この一年間努力して下さって本当にありがとうございます。また、次の新しい一年が始まります。日本プロ・ライフ・ムーブメントの事務所ではもつともっとたくさんの方々にこの運動に参加して頂きたいと望んでおります。でも、皆様はそれぞれ、お仕事を持っていて、いらつしたり、育児にお忙しかったりと直接事務所に足を運ぶことが出来ない方も多いためです。それで、お一人お一人が出来ることから始めましょう。祈ることが出来ます。周りの方々に話す事も出来るでしょう。そして、この運動のために寄付すること一つの方法です。皆様から頂いた寄付は折り機、電話代等の事務費に使わせて頂いております。

あなたが今いるところで出来るプロ・ライフへの参加を願っています。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

我々が「同胞の保護者」であることを論じられました。(創世の書 九:5) 法がこのことを禁ずるとしたら、それはもはや法律ではなく、本来の目的である真の正義が行われる秩序ある社会的共存を無視することになります。「私達が敬虔に謹厳に静かな平和な生活を送る」ことなどあり得なくなってしまう。(ティモテオへの第一の手紙 二:2) 法律よりも良心が常に優先されるのです。このような問題に関しては、良心によって法律に反対することが我々の重大かつ明白な義務です。「人間よりも神に従わねばなりません。」(使徒行録 五:29)

Q: 祖母は脳腫瘍で苦しんでいて、とても辛そうです。寝たきりのままでひきつけを起し、震えている様子はとてもひどいものです。実際、自分でも、神様に早くお召し下さいと祈っているようです。私の家族にしても、祖母の看病をして、その明らかな変わり様をみていることは辛いのです。祖母に多量の薬を飲ませると早く死ねるだろう、等と考えないようにしても、考えずにはいられないことがあります。唯、どうしてこんなひどい目にあってまで、祖母は生き続けなければいけないんだらうと、どうしても理解できません。

A: あなたが慈悲の思いからそう考えているのはわかりますが、それは間違いです。世間では、楽しく生きることが重要な価値を持って、負担となるものや寛容力、愛情、気づかいなどを必要とする生

き方は価値がないかのように思われがちです。しかし、本当の哀れみの心を持つことは、他人の痛みがわかるということ。見ているものが、耐えられないほど苦しんでいる人を殺すことにはありません。あなたのおばあさんに関する限り、神に苦しみを訴えて御慈悲を願う気持ち強いようです。イエス・キリストを信じる我々は、人の生命は神の手にあり、死が必要だと神が思った時が死ぬことだと思っています。「それは、生きるものすべてに、主から与えられる定めである」(シラ書の四十一:4) どんなに病気が苦しくても、「斜陽のように私の日は消え、草のように枯れた」と叫びたくても、どんな時も神を信じましょう。(詩篇 百一:11)

わたしは、安楽死は神の法を著しく破ることだと強く信じます。強い気持ちを持ち続けられるよう神に祈りましょう。「主よ、幼い頃より、年をとってこの髪が白くなるまで、あなたはいつでも私の希望であり、抛り所です。神様、私を見捨てないでください。あなたの力を私が子孫にしますそのときまで。」(詩篇 七十一:5と18)

